

「ぶんせき」誌の付加価値向上を目指して



四 宮 一 総

残暑の厳しさが収まらない中、地方で開催された学外委員会に出席し、現地で1泊したのち、帰路についた。台風を心配した天候であったにもかかわらず、機上から見下ろす海岸線は日本地図さながらの鮮やかなパノラマとなった。私は手にしていた原稿に目を通す義務を感じながらも眼下の景色に釘付けになった。それから1か月以上の時間が経過し、学外委員会の内容はうろ覚えになったが、美しい風景は色あせずに臉に焼き付いている。

「ぶんせき」誌は、現在、一般会員には冊子ではなく（希望者には実費で配送可）、電子版で配布されている。目次と編集後記はメールマガジンで配信されているので、読みたい項目が目にとまった場合には、「ぶんせき」誌のサイトから直接記事にアクセスすることができる。この利点は電子版の特徴であり、コンピュータが不可欠の日常では違和感なく行われる。一方、目にとまらなかった題目は記事にたどり着くことなく忘れ去られる。冊子では何気なく目にした隣の記事が思いのほか重要であったという経験は誰しもあると思われるが、電子版では意識して自ら読まなければ、記事の方から目に飛び込んでくることはない。電子版の抱える根本的な問題点である。

今年の3月下旬、勝田正一先生（千葉大理）から編集委員長を引き継いだ。かつて編集の際に感じた編集委員に共通する分析化学への熱い思いを思い出したためかもしれない。記事は編集委員の発想と人脈、時流に対するアンテナなどが原点となり、執筆者の手により完成される。こうした点では、編集は研究と変わらないクリエイティブな作業といえる。編集委員会もオンラインとなり、かつての口角泡を飛ばすような議論はなくなってしまったが、分析化学への熱い思いは何ら変わらず継承されていると感じている。第83回分析化学討論会（富山）では、本会三誌合同展示ブースの出展に初めて携わったが、編集委員諸氏と話をし、一層その思いを強くした。

分析法は、創出者が時間をかけて完成させ、世に送り出したものである。会員諸氏には、目的以外の記事にもぜひ目を通していただき、編集委員と思いを分かち合っていただければ幸いである。気にしなかった隣の記事の中に将来のヒントが隠されているかもしれず、その発見は私が機上から見た景色と同じくらい忘れられないものとなろう。この付加価値こそが会員諸氏をつなぐ「ぶんせき」誌の更なる使命であり、その向上に心を砕きたいと思っている。

〔Kazufusa SHINOMIYA, 日本大学薬学部, 「ぶんせき」編集委員長〕